

昭和 6 2 年度

生徒指導とカウンセリングとのかかわり

川崎市総合教育センター カウンセラー研修員

生徒指導とカウンセリングとのかかわり

¹ 渡辺 和夫

はじめに

最近、子どもを取り巻く家庭環境、社会環境等の変化により、万引・喫煙など反社会的問題を起こす生徒や登校拒否などの非社会的問題をもつ生徒が増えてきているように思われる。

私の所属校である柘形中学校においても、生徒指導上問題をもつ生徒をかかえ、日頃、生徒指導担当としてその対応に追われている。

問題をもつ生徒に対する自分自身の指導姿勢を振り返ってみると、受容的な態度で生徒に接することも必要だと頭ではわかってはいたが、望ましくない行為にばかり目を向け、その行為に対して叱ったり諭したりという訓育的指導に終始しがちであった。

しかし、そのような指導では、問題行動がなかなか改善されない場合も多く、指導の困難さを感じていた。

このような折、カウンセラー研修員として、当センターで、生徒指導・教育相談について研修する機会を与えられ、自分の生徒指導の考え方や態度について見直すことができた。

研修期間は、第四研究室に所属し、受理会議、事例会議、教育相談実習等に参加して、研修を続けてきたのであるが、これらの研修を通して、カウンセリングマインドで生徒やその保護者に接することの大切さを改めて感じるとともに、今後、生徒指導を行う上での多くの示唆を得ることができた。

この一年間の研修を通して学んだことの一端を報告したいと思う。

1. 研修のねらい

文部省の「生徒指導上の問題についての対策」では、教育相談について、次のように述べている。

「教育相談は、生徒自身が現在の自己の問題を自己理解し、どのようにすればその問題を解決できるかについて自己洞察を行い、自らの内に持つ成長の力によって自己を変容しながら問題を解決していくように援助する過程である」（生徒指導資料、第15集、生徒指導研究資料、第10集、「生徒指導上の問題についての対策」——中学校・高等学校編——昭和53年、文部省）

しかし、先にも述べたように、自分の生徒理解や指導姿勢は、診断的理解が中心で共感的理解に欠けていたこと、相談的（受容的）態度よりは、訓育的な態度の方が優先しがちであった。

生徒が自分で問題を解決できるように援助してやるというよりは、説得したり叱責したりして、生徒を変えたいとするかかわりの方が、強かったように思われる。

そこで、今までの生徒やその保護者に対する理解の仕方やかかわり方を見直し、カウンセリングマインド（カウンセリングの見方・考え方・接し方）を日常の生徒指導にどう取り入れ生かしていくかということをテーマに研修してみようと考えた。

¹ 川崎市立柘形中学校教諭（長期研修員）

2. 学校における実践事例で学んだこと

事例1

A子は、1・2年の時、長期に欠席したが、3年生に進級させることにした。進級することにより、新たな気持ちで登校できるのではないかという私たちの期待や願いがあったからである。

しかし、私たちの期待に反して、3年生に進級したが、全く登校できなかった。

この間、学級担任は、何度となく家庭訪問を繰り返し、A子の家庭での様子等について父親や本人と話し合いをしてみたが、なぜ登校できないのか、その原因がつかめなかった。

結局、原級留置となってしまう、再度、3年生をやり直すことになった。

A子や父親との話し合いからは、なかなか原因がつかめないで、卒業した1・2年生の学級の生徒達から話を聞いてみたところ、こんな言葉が返ってきた。

「A子のそばに寄ると臭い。汚いのでみんなそばに近寄らなかつた」と。

A子は、クラスの生徒達からいやがらせを受け、そのため傷つき、その悩みをだれにも言えずにいたのである。

私たちは、とてもショックを受けた。そのようなことに気付かなかつた私たち教師の不注意を悔いた。そして、だれにも心の苦しみを言えずに悩んでいたA子の気持ちを思い、心が痛んだ。

今まで、A子にだれがどれだけ関心を向けていたのだろうか、小学生の時に母親と離別したA子には、身のまわりの世話を十分やいてくれる人もいなかったのであろう。

A子にもっと関心を向けてやらなければ、心の傷はいやされないだろう。そして、自尊感情も取り戻すことはできないのではないかと考え、家庭訪問を続けてみようと思つた担任と話し合つた。

新任は30代の女性教師で、頻繁に家庭訪問を繰り返した。

A子の過去のことには触れずにかかわつた。A子の気持ちの中には、前学年のことは触れてほしくないという思いがあるのではないかと思つたからである。新任ともA子が自分から話すまでは待とうという気持ちで接した。

父親には、A子のいない所で1年生の時のことを話し、父親としてできる範囲で身のまわりのことについて気を配ってもらうように協力を求めた。

家庭訪問で、新しい学級の仲間が待っていること、修学旅行にも一緒に行きたいという担任の気持ちを熱心に伝えた。このような話題には、あまり反応しないA子であったが、進路の話題になると話に乗ってきてくれた。この時、やはりA子は、将来のことが気になっているんだなと担任は感じたという。

担任とともに6月の修学旅行には是非連れて行きたいと思ひ、毎日のように学級担任と家庭訪問をして説得したが、「行く」という意志は示さなかつた。しかし、「旅行が終わつたら学校へ行く努力をしてみる」という言葉が、初めて出て、学級担任とともに喜び合つた。

修学旅行の代休が終わりA子は登校してきた。担任も私も言葉にはいい尽くせないうれしさでいっぱいであった。

1年間が過ぎてA子は就職先も決まり卒業していった。

今になつても、私たちのA子へのかかわりが、どのような意味でA子にとって助けになつたのか率直なところよくわからない。

何度も登校することを促した私達の説得を、A子はどのように受けとめたのであろうか。

何とか登校できるようになつて欲しい。A子に何か援助してやりたいという私達の思いが、A子

に伝わったのかもしれない。A子は、「私のことを真剣に考えてくれる人がいるんだ」という実感を抱き、他人に対する信頼感を取り戻したのではないかと思う。

A子とのかかわりを通して、一人一人の生徒の内面に目を向け理解することが大切であるというごく当然のことを、体験的に理解できた事例である。

事例2

E男は、欠席も少なく、学校には普通に登校できる状態であるが、多分に気分屋的なところのある生徒であった。感情の起伏が激しく、その時の気分で衝動的に行動してしまう面が見うけられた。時には、下級生を呼び出し、おどしたり、髪の毛を染めてみたりするなどの行動もあった。

そのような行動に対して、その都度、叱責や注意を与えるという指導を繰り返したが、行動はいつにも改善されなかった。改善されないばかりか、バイクの無免許運転、シンナー、喫煙というように行動がエスカレートし、警察に補導されることもしばしばであった。

親を学校に呼び、本人も一緒に話し合いに参加させてみたが、親の言葉にも全く耳をかそうとしなかった。

このような場合、教師と生徒との関係が悪化してしまうことが多いが、E男の場合も言葉を交わすことすら難しくなってしまった。そのため、全く手の打ちようがなくなってしまったのである。

E男に対する私のかかわり方を振り返ってみると、現象としての行動にだけ目が向いてしまい、何とかそのような行動を取り除こうとして躍起になり、叱責や注意ばかりを与えていたのではないかと思う。

なぜこのような行動を繰り返すのかということ、E男の立場になってじっくり考えてみようという姿勢に欠けていたような気がする。

人間の行動の原動力は感情にあると言われるが、E男があのような行動をとったのは、そうでもないではいられない感情が心の中に充満して、抑えきれずにやってしまったのだろう。今は、そのように思えるのである。

E男の行為を許容することはできないが、そうでもないではいられなかったE男の気持ちを、E男の枠組で聞いてやることのできたなら、E男との関係を持ち続けることができたのにと後悔している。

3. まとめと今後の課題

カウンセリングマインドを生徒指導にどう生かすかというテーマで研修を行ってきたが、訓育的な指導ばかりではなく、生徒の心をもっと共感的に理解しながらかかわっていくことの大切さを学ぶことができた。

しかし、単に理屈の上でわかっただけで、実際にはまだまだ動けない自分ではないかとも思っている。今後、生徒とかかわるなかで自分を見つめ、少しでも動けるように自分を高めていきたいと思っている。

おわりに

この一年間の研修において、生徒指導・教育相談を新たな視点から見つめ直すことができ、生徒指導の難しさを改めて感じました。

数多くの事例に接することができたのも収穫のひとつでした。今後、生徒理解をする際、参考にしていきたいと思っています。

また、相談室の先生方が、じっくり時間をかけながら子どもの心を育てるかわりを続けている姿にじかに触れることができ、たくさんの刺激を受けました。

いろいろな問題をかかえた子どもたちをよりよい方向に導いて行くことは、学校も相談室も共通ではないかと思います。もっと相談室の力を借り、連携しながら生徒指導を進めていきたいと考えています。

最後になりましたが、この一年間、総合教育センターで勉強させていただいたことに感謝するとともに、伊藤和彦所長をはじめ、第四研究室長斉藤祝男先生、指導主事の先生方、相談員の方々、特に、ご指導いただいた指導主事の本間千尋先生には、厚く御礼申し上げます。

〈参考文献〉

「意欲をひきだす生徒指導」 小泉英二他編，教育出版

「子供の心が見えてくる」 渡辺康磨・ミサ，サンマーク出版

〈指導・助言者〉

川崎市総合教育センター第四研究室指導主事，本間千尋